

# 136年の教育の歴史をひもとき さらに次へとつなぐ 『クラボウ教育史』発行

クラボウ136年の教育の歴史をまとめた書籍が今年5月9日に刊行された。

1888（明治21）年、創業に携わった人々の想い、そして世紀を超えて継承してきた経営理念の根底にある「人間尊重」の精神、会社の枠を超えた社会教育。実践を重視した社内教育等について綴られている。編集担当の網島康高氏（社友・教育史担当）にその思いを聞いてみた。

## 創業の精神に学ぶ

社友 網島 康高

私が、教育史の執筆を通して痛切に感じることは、歴史から学び、教訓を生かし実践することの大切さです。

21世紀、コロナ禍は人類が力を合せる好機でしたが、逆に想定外の戦争が始まり、分断と対立の世界に後戻りしています。

『春秋左氏伝』から用いた社是「同心戮力」には、仲間と絆を強くして力を合せるだけでなく、すべての利害関係者と良好な関係を築くという意味がありました。社訓「謙受」には、倫理観を持って行動することが、コンプライアンス問題を未然に防ぐだけでなく、むしろ利益につながるという史実に基づいた教訓、教えが込められています。

藤田社長（当時）の「面白いことやっぺやろう。」のメッセージも初代社長大原孝四郎から



つなしま やすたか  
網島 康高さん  
元人材開発部長・日  
本労働科学学会理事

世紀を超えて継承された教えます。教育史では、こうした創業者たちからのメッセージを共有し、継承したいと思いつく成しています。

### 「自分の天命は何か」

考えるきっかけに

「何のために働くか、何のために会社はあるか」歴史から学び、働く目的を問い直す契機となれば幸いです。

第二代社長大原孫三郎は、自身の天職の第一を教育と志し、「職工教育部」「倉紡工手学校」等、従業員教育の枠を超え社会教育に注力、社内報『倉敷時報』も発刊しました。さらに、第四代社長大原總一郎が「珠磨かざれば器とならず、人学ばざれば道を知らず」と記した襖絵の揮毫を棟方志功に依頼したのは、第二次世界大戦の困難を極める環境の中で、学生たちを励ますためでありました。

創業期においては「三余塾」という塾生たちのつながりと志が創業の背景にあることも紹介し、あわせて論語の中の言葉にある「有隣」の教え、「徳は弧な

らず、必ず隣有り」「徳」の大切さも紹介させていただきました。



▲ 編集風景：左から網島さん、岡崎さん（元ドウシン編集長）松岡さん（稲垣尚美堂）

### 編纂へのご協力に感謝

今回教育史編纂の役目を頂いたことを、藤田会長をはじめ、ご協力いただいた方々、諸先輩には心から感謝申し上げます。後輩の皆さんには、こうした歴史を持つクラボウにぜひ誇りをもっていただきたい。ただしその歴史は、皆さんにとっては額縁のようなもので、この額縁の中に、一人一人が自分らしい作品を創り、新しい歴史の1ページを飾ることを期待します。

## 楽しみながら読みやすく

本教育史は、一般的な社史のような堅苦しいものではなく、できるだけ楽しみながら読んでいただけるものにしたいと考えました。と言っても手掛かりは『倉敷紡績百年史』、65周年史の『回顧六十五年』くらいでした。が幸いクラボウには、明治の末に創刊された社内報『婦人之友（現ドウシン）』があり、また、教育の目的で発行された投稿誌『倉紡』がありました。

こうした資料を通してクラボウで苦勞され活躍された先輩諸兄と対話するような気持ちで編集しています。表紙のデザインはクラボウの発展をイメージしたKマーク、色はコーポレートカラー、額縁も意味しています。



## 読みどころ — 各章のここがポイント

## 第一章

黎明期、創業以前の岡山県の教育風土、倉敷の地勢からはじまり、政府払い下げの企業が多い中で、若き青年たちが立ち上がります。彼らにちな

がりのあつた三余塾での縁、初代大原孝四郎社長のメッセージ「やる可し大いにやる可し」の言葉の背景にあつた「可公園」（現在の新溪園）についても知っていただき、ぜひ訪れていたいただきたいところです。

## 第二章

第二代社長大原孫三郎の社会貢献事業は広く知られて

いますが、彼が教育を天命としていたことは、あまり知られていないのではないのでしょうか。職工教育部、倉紡工手学校を創設。大原美術館を創設したのも画家の育成、社会教育が目的でした。「若竹の園」の保育園や幼稚園の設置も今日の働きながら子育てをする環境づくりを百年も前に実現させていたことは特筆すべき事業でした。

## 第三章

戦時体制の中で国の政策に従い、軍需産業化に協力した時代。社内報『倉敷時報』が『同心』に改題されたもの

の頃で、大きな犠牲も払いまし。第四代社長の大原總一郎は、戦時下でも、学生や沖繩出身の社員を支援する一方、戦後は、利害を超え中国にビニロンの技術供与を貫行。公害に対する厳しい見解を発表、企業の社会的責任を明確にしていきました。

## 第四章

戦後米国から民主的な価値観に基づいた管理手法や教育技法が導入され、さまざまな教育機関も設立されました。

クラボウは、そうした新しい教育手法をとり入れるとともに、「家政塾」という人格形成のための独自の塾を設立、成果を収めました。また外部の高等学校、短大、専門学校等と提携、働きながら学ぶ制度を確立し、さらに余暇の時間を生かした文化・体育活動にも注力しました。

## 第五章

創立百周年を機に、現在の本社ビルが建設され、新しい経営理念が制定されました。

また将来のクラボウ像が若手社員の手で編纂され、社員の行動指針をまとめたハンドブック『期待される行動社員』が刊行されました。また非繊維事業の拡大施策の中で人材開発の事業化を図つたのもこの時期です。

## 第六章

昨年G7労働雇用大臣会合が倉敷アイビースクエアで開催されました。世界の政治

経済が経営に影響を与える時代となりました。歴代の社長は、厳しい環境下で教育的メッセージを発信、一丸となって逆境を乗り越え、新たな挑戦を続けてきました。こうした歴史の中に教訓を見出し、未来のビジョン・行動指針・自己実現にもつないでいただければ幸いです。

